図書館の窓から

金山正

信

てくれるものもある。西側の窓辺に立つと様 相は一変する。近代的建築としての神学館を はじめ、弘風館等の建物が、どっしりとその 落ちつきのうちに偉容を誇っている。相国寺 への道路上には学生諸君の通学用の車しかも 最新型のものがぎっしり並べられている。そ 最新型のものがぎっしり並べられている。そ 最新型のものがぎっしりかであれている。 で学生がひしめき合っているのも見える。 あたれらは、先頭に旗をおし立て、手に手にプ ので学生がひしめき合っているのも見える。 を学生がひしめき合っているのも見える。 で学生がひしめき合っているのも見える。 と で学生がひしめき合っているのも見える。 と で学生がひしめき合っているのも見える。 と で

かにしかもやわらかく目をなぐさめてくれら、はるかに相国寺の山門をかとむ青松が静

そこからは、わが大学の歴史を省みさせ

れの想いで胸がしめつけられる。さまざまの群の通り過ぎなどを見つめていると、あれてる。その叫んでいる内容はききとれない。一

きたい。

意のあるところを汲んでいただ

の片隅にある館長室に入ると、

北側の窓か

袋をもって、今日のわが大学図書館としての

にしたい。しかるに、いつまでもこの古い皮い伝統を守りたい。由緒あるこの建物を大切

新しい機能を果しうるであろうか。三階西北

必要性もあった。われわれは先輩の残した貴

の改造を重ねてもきた。それにはそれなりののは、古典的な香りをひそめている。幾度か

社の躍進とともに前進してきた。建物そのももにかがやかしい伝統を背負っている。同志

わが同志社大学図書館は、本学の歴史とと

歴案などめぐらしているうちに、やがてはが 思案などめぐらしているうちに、やがてはが まんのならない壁のようなものにつき当たっ てしまう。その壁はいったいどのようなもの でしまう。その壁はいったいどのようなもの でその壁を破り、新しい皮袋の用意ができな てその壁を破り、新しい皮袋の用意ができな いものか。有効にして適切なる手段はないも のか。このようなおもいは、おそらく学生も のか。このようなおもいは、おそらく学生も のか。このようなおもいな、おそらく学生も のか。このようなおもいな、おそらく学生も のか。このようなおもいな、おそらく学生も のか。このようなおもいな、おそらく学生も のか。このようなおもいな、おそらく学生も のか。このようなおもいな、おそらく学生も のか。このようなおもいな、おそらく学生も のか。このようなおもいな、おそらく学生も のか。このようなおもいな、おそらく学生も のか。このようなおもいな、おそらく学生も

それにふさわしい文献資料の充実とその利用 までもない。それぞれの機関は、この目的達 内におけるあらゆる機関が、「研究と教育」 成のための協力機関たるところにある。大学 使命は、「文献活動を通じて」大学の目的達 ばなるまい。いうまでもなく、大学図書館の の便をはからなければならない。これらのこ くては、その実効を十分に発揮しうるもので 究と教育には、一方で、実験施設を不可欠の 成のために、さらに、固有の使命を担ってい この目的達成のために同調しているこという の目的を達するためには、何をさておいても はあるまい。大学における研究と教育の本来 といえども、他方で、文献活動の裏付けがな 要素とするものもあろうけれども、その場合 にする所以である。わけても大学における研 るところにある。これが、他の機関とその職 を通して」大学における研究と教育に協力す る。大学図書館の固有の使命は、「文献活動 のための協力機関であり、それぞれの機関が、 まず、自らを深く省みることからはじめね 機能、職員構成から設備にいたるまで異

先に、日本学術会議の総理大臣にあてた「大とは、およそ大学というものが世に生まれては全面的に賛意を表しながら、さてその実践の問題となると、必ずしも事実をともなっていないうらみなしとしない。そのためにかたに、日本学術会議の総理大臣にあてた「大とは、およそ大学というものが世に生まれてとは、およそ大学というものが世に生まれてとは、およそ大学というものが世に生まれてとは、およそ大学というものが世に生まれてとは、およそ大学というものが世に生まれてとは、およる大学というものが世に生まれてとは、おいまない。

からして、図書館整備につき制度化せんとしからして、図書館整備につき制度化せんとした学ととで、図書館の整備拡充について」の勧告(昭和四十年二月十二日付)、および、それを織り込んでいる大学基準等研究協議会の文部大臣に対するる大学基準等研究協議会の文部大臣に対するる大学基準等研究協議会の文部大臣に対するる大学基準等研究協議会の文部大臣に対するる大学基準等研究協議会の文部大臣に対する。

ているところからも十分に察することができる。これらの動きは、大学の教科課程における。これらの動きは、大学の教科課程におけるの各大学の学生数の増加にともない、既存のの各大学の学生数の増加にともない、既存のの各大学の学生数の増加にともない、既存のの各大学の学生数の増加にともない、既存のの各大学の学生数の増加にともない、既存ののを表するとができ

身、理の当然といわねばなるまい。
もとめ大学としての研究と教育の実効を収め
もとめ大学としての研究と教育の実効を収め
もとめ大学としての研究と教育の実効を収め

ける閲覧座席数についてである。従来の基準 けは、ここに明示し、その有する意味に及ん ること、大学の使命として当然の事理だから みると、学生の自学自習に要する設備を整え でのことはあるまい。重ねていうが、大学が 何が故にこれらのことを大学図書館に要求し 指定図書の充実である。学生の講義にそなえ 席数を設けることを要求している。その二は の改正では、少なくとも百分の一〇以上の座 おいて、百分の五以上を要求してきた。 によると、その座席数は、学生数との割合に でおきたいと思う。その一つは、図書館にお 白はない。その最少限の問題として次の点だ のの内容を、ここにいちいち具体的に示す余 ているか。立案者の趣旨などせんさくするま 文献資料を十分に用意せよ、というのである。 るための勉学ないしその他自学自習に要する 面において、学生教育の場であることから これらの一連の制度化されんとしているも

う、まず主催者に警告すべく申し合せたこと えみるならば、それらの制度上の要求とし 省に設置された図書館情報課の職能と合せ老 っとも有効にして適切なる方法を講ずるよ その結論として連盟加入の各私立大学が、も その含む意味の重大性をあらためて確認し、 同志社大学で行なわれた図書館研究集会の 和四十年八月、私立大学連盟主催のもとに、 最少限度の要件となる。この点にかんし、四 ないし学科を増設せんとするならば、これら それ故に、もし、既存の大学が、新しい学部 どうかの判定基準になるということである。 どまらず、学部の増設・学科の新設をなさん された場合、いかなる意味を有するかにつき、 である。われわれは、ここに、それが制度化 ともその申請時までに用意していることが、 の制度上の要求するところのものを、少なく り、設置基準に要求する施設が整っているか とするにさいし、その必須要件として、つま らば、これからの大学の新設の場合のみにと いうのは、もしこれが実施されるにいたるな 注意しておかなくてはならぬものがある。と 「図書館長会議」において慎重な討議を重ね、 故なきことではあるまい。すでに、文部

らゆる困難いかなる隘路といえども、万難を として、その一端を担わんとするならば、あ ば、 おいてなされていなくてはなるまい。こと ような格差は、さして問題にする要はないと とは、現段階において、すでに銘記しておか よろこぶべきことである。だが、他方におい ければ、大学人としての資格を欠くとのそし なすべきとというまでもあるまい。そうでな 排して自らの使命を果すべく、最大の努力を 大学として、わが国における最高の教育機関 は、大学の使命につながる。自らが大学と称 を十分に補うに足るものの裏付けが、他面に いう者もあろう。しかし、それならば、それ ねばならぬものである。視方によれば、その なる格差を生ずるにいたるであろう。このと のありとせば、それらの間には、やがて大い て、私立大学が、今にしてその用意を怠るも て、わが国の教育行政上の見地から、大いに 充実がなされるであろう。それはそれとし いたるまで、国の予算の裏付けをえて、その て、国立大学においては、地方に在るものに 深い認識とその実践を要するであろう。 大学としての使命を果さんとするなら

いる者に三思すべきことを求めるのは、大学の一員としての立場からは、穏当を欠くことの一員としての立場からは、穏当を欠くことの一員としての立場からは、一様当を欠くことの一員としての立場からは、一様当を口にするならば、大学自らの識見学の自治を口にするならば、大学自らの識見ができるのなること、何びとも否定することは許されないであろう。

T.

題がピンと来ないであろうから。 われ図書館員は、内部的にいかなる困難があわれ図書館員は、内部的にいるのである。 図書館内に未整理図書が滞積している。 受入図書を速やかに整理し利用に供すべきことは、何よりも先に心掛け実行しなくてはならぬものである。図書館内に未整理図書が滞積しているようなことがありとせば、それは図書館人るようなことがありとせば、それは図書館人るようなことがありとせば、それは図書館人である。図書館内に未整理図書が滞積しているかどうか、深自らが、その職責を果しているかどうか、深自らが、その職責を果しているかどうか、深自らが、その職責を果しているかどうか、深

りをまぬがれまい。大学行政の職責を担って

では、わが同志社大学の図書館にかんする問

一般論は止そう。そういう見地からの記述

果すべく、 ろうとも、 どとに受入図書は急増しているが、整理部門 の定員は旧態依然その増加をみず、 その隘路を打開し、 鋭意研修と努力を重ねている。任 自らの使命を 整理関係

の場所の狭隘さはすでに限度を越えている。



もあるまい。 使命感にもとづき努力しているか、それにこ ないことは、これを放置してよいということ ていただきたい。しかしながら、苦情をきか らの苦情をきかない。責任感の旺盛さ、察し しかるにもかかわらず、これらにつき館員か たえるだけの用意をも整うべきこというまで では決してない。館員諸氏が、いかに自らの

うことである。「新図書館を建設しよう」と てか。端的に記そう。わが大学図書館の施設 みの力をもってしては、どうにもならないも て自ら処理せねばならぬ。 慢でないか」とのしかりを受けつづけてい でにしばしば、 その使命を果しうるものといいうるか、 が、同志社大学の現状ならびに将来に照し、 む以外にはない。それは、いかなる点につい のがある。当局者の良識に訴え、善処をのぞ われわれ図書館員は、「何をしているか」「怠 いうことである。この声は、学の内外からす 図書館内部にかんするものは、内部におい さらに、声なき声として、その要望がひ しかも強くあげられている。 しかし、図書館の とい

> なるまい。しかるに、一たん図書館の現状に しての使命感にあふれているが故に外なるま ることの証左となしうるであろう。大学人と ろのうちにみちみちているのか。それほどに 何が故に、そのような要望が同志社人のここ それを実現するよう最大の努力を惜しんでは としては、何をおいても、この熱意にこたえ、 に将来の発展を期待することができる。大学 い。これあればこそ、わが大学の現在ならび わが同志社人には、研究と教育に熱意を有す

まい。 の屋根の一部を無情にも引きはぎ、 要望が、 直視せられたい。新図書館を建設すべしとの 命を通して、大学の目的達成への協力が不能 館の現在の施設をもってしては、図書館の使 は、ここに記すをはばかりたい。ただ、 実である。その他の図書館施設の具体的現状 来したことなどは、誰にも知られたくない事 か、ここにあらためて記すまでのことはある に近いということのみを記しておく。現状を 何が故にますます強くなりつつある 雨もりを

の苦情のみをここに記すつもりではない。 たんに、 図書館の現設備の不十分について 义

しひしと図書館人の身にせまってきている。

目を向けてみられたい。去る台風が、閲覧室

ろう。 の比率からみても桁ちがいに少ない。前記の 現在の閲覧座席数はここに記すをはばかる。 い。しかるに現状はいかん。一例を示そう。 さわしい図書館を用意していなくてはならな 省みている。それを実現するには、それにふ 不足を感じさせることができないのか、深く きつけ、そこにこもらせ、読書の、思索の、 ては、それらの学生を、どうして図書館に引 善処するかにある。手段も方法もいろいろあ ものありはしないか。問題は、それをいかに で良いのか」との疑念が、識者に通じている の言い分もあり、また事情もあろう。「あれ かけているものがないか。それにもそれなり 中には集団の名のもとに多くの学生に迷惑を として教育の一助をなしているものもある。 にも意を注がれたい。それらには、課外活動 治の旗印のもとになしているもろもろの活動 いる急増した学生集団をみられたい。学生自 う側面から記そう。今出川校地にひしめいて ある。ここでは、大学が教育機関であるとい つまり学問の醍醐味を会得させ、日々時間の 書館の窓から、学園全体をながめてのことで 図書館の窓を通していうかぎりにおい その収容人員たるや、現学生数と

学生が、校内に一歩足を踏み入れるならば日 こには記すまい。ただ、われわれは、万余の ある。現状たんに閲覧室の不備のみではな 図書館としての機能を十分に果しうる設備に れに適する設備が備わっていなくてはなら 覧室は、それにふさわしい環境と雰囲気とそ 今出川校地に、閲覧室に転用しうる教室はな よい、という関心をもたせるに足るだけの図 園内においては、図書館がもっとも居心地が に入らない日は登校した気分にならない、学 に一度は必ず図書館を訪ねたい、否、図書館 い。その他の面にわたっているが、それはこ い。われわれ図書館人の要求するものは大学 能を果しうるものではない。大学図書館の閲 としても、それで、図書館閲覧室としての機 い。かりに、どれかの教室をそれに転用する あろう。しかしながら、現実の問題として、 んに形の上のみでは、座席数の増加をみるで る者があるかもしれない。それによって、た いのか。その打開策として教室の転用を考え 物理的に不能の事実である。果してこれでよ い。多数の学生を図書館に収容することは、 制度上の要求する座席数などはるかに及ばな

されるであろうか。不当なる要求であろうされるであろうか。不当なる要求であろうな。学生をして学問の醍醐味を会得せしめ、大学はそれなりの用意をもって臨まなければ大学はそれなりの用意をもって臨まなければ大学はそれなりの用意をもっていません。大学自らが教育機関として、学生生活の現状をせめるもの用意なくして、学生生活の現状をせめるは当らない、と考える。

それ、校祖の遺訓のみならず、現同志社人の その他学園生活のさまざまの経験を通して、 した所以も、ことにつながる。 たきことを、要望書を添えて、 先に、今出川校地に大学図書館を新築せられ しい土壌でなくてはなるまい。 大樹たらしめんとするならば、それにふさわ 藪の中でも不適である。その種をして立派な 受け入れる地盤が、岩の上であってはならぬ。 えよ、人を。しかしその蒔く種が、その種を 自らその素養が形成されていくであろう。植 の教職員の薫陶に負うものきわめて大きい。 つこと大なるものがあろう。わけても、個々 う。大人物の養成は、教室における授業にま すべてのこころのうちにひそむ 念願であろ わが同志社大学から、偉大なる人物出でよ。 図書館から、 当局者に申請

書館の実現を念願して止まない。無理だと評

りそれを実践せんとするならば、それらの施 すべき施設少なしとしない。校地の不足、教 6 る。財政面の苦労のほどは、われわれの想像 苦心のほどを察して多としているつもりであ でのことはあるまい。われわれは、当局者の 比べて。そのことは、これ以上ここに記すま 施設との対比において、わけても現図書館と わが大学の誇りの一つとしてよい、と私も思 完成した。人とれを讃えて「日本一」という。 は、大学自らの姿勢にある。大学が自治を守 室の不足、図書館および体育施設の不備等々 見地からのことである。大学としてなお充実 であろうか。省みるに、それは、大学全体の われわれが会館のすばらしさを讃えながら をこえるものがあろう。それにもかかわらず 言外にふくむものなしとしないか。その他の 充実すべきか、その順位についての判断であ あろう。それらの間において、いずれを先に すばらしい偉容を誇る記念会館は、 しかしながら、世人のその讃辞の背後に 世評はさして意にとどめまい。 なお一抹の疑念が去りきらぬのは何が故 憂うべき すでに

> けて立つ」と。当局者のその気構えの本質を とせば当局者が本来の職責を果しているとい それらからの圧力に屈することがかりにあり する物事の順序を見失うことありとせば、否 他との約束あろうとも、 きまえ、それにしたがって断行すべきであ う機関が、自らの判断においてその順位をわ 設の充実にさいしても、それぞれの職責を担 らば、他から要求されるまでもなく、積極的 ただしたい。それがかりに、要求あればそれ はならないはずである。あるいはいう。「受 責任のがれのためのかくれみのに利用されて る。たとえ過ぎたる時期に学生とのまたその していくべきではないであろうか。 排除し断固として自己の所信にしたがい実践 めた上で、いかなる圧力にも屈せず、 に樹立した計画のもとに、ことの順逆を見定 る者がそれにふさわしい自覚のもとにあるな んなる責任の転稼ではないか。その職責にあ に応じて実現していくという意味ならば、た いうるであろうか。大学の自治は、たんなる 大学全体の見地から 困難を

育機関である、というととにさそわれたにすが故にそれたか。大学が学生にたいしては教のい、わき途にまでそれたようである。何

果し方等、その一つ一つのすべてが教育の姿 のとる日々の態度、大学内のそれぞれの機関 成の場でもあらねばならない。それは教職員 は、たんに学問というのみではない。人格形 ぎない。学生が在学四年間に学びとるところ ならず、それ自身が、教育の実践的側面であ の処すべき態度を自ずと学びとっている、と の基本的態度のうちから、やがて世に出てそ 勢であり、それぞれの視角において、学生が の在り方、その構成員の機関における職責の 問われる一面もあろう。 る、と考えている。そこにこそ大学の真価の の念など食い入る余地はないであろう。のみ 態度をもってことを処するならば、大学不信 大学人が自己の信念にもとづいて、毅然たる いうことを見失なってはならない。すべての とにある。学生は、教育機関にたずさわる者 言外に学びとっていることきわめて大きいこ

たかったまでである。(一九六五・一〇・一〇稿)かとの要望、その苦衷を深く察していただきさわしい図書館を今出川校地に新築せられたされたい。要は、同志社大学にふ以上、図書館の窓から、あるいは途を踏み

(法学部教授·図書館長)